

未来の私たちのために このまちでできること

気候変動は農作物や畜産物に影響を及ぼし、酪農業、農業などへの被害が予測されています。少しでも影響を小さくするため、このまちで暮らす私たちに何ができるのでしょうか。

キーワードは「適応」と「緩和」

それでは、日々深刻化する気候変動に対して、私たちに何ができるのでしょうか。対応策には、「適応」と「緩和」があります。

「適応」とは、地球温暖化や異常気象など、既に起こっている気候変動の影響に対して、自然や生活のあり方を調整して、新しい気候条件に慣れていくことです。私たちは集中豪雨による洪水や土砂災害、渇水、熱中症、農作物への被害などのリスクに備えておく必要があります。具体的には、熱中症予防、防災ハザードマップの確認、水の再利用、農作物の品種改良などがあります。

それに対し、「緩和」とは、気候変動の原因となる温室効果ガスの排出を抑えたり、CO₂の吸収を増やしたりすることです。例えば、自動車のアイドリングストップをしたり、節電や節水を実践したり、ごみを分別してリサイクルにつなげたり、植物や森林の生育環境を保全したりすることが挙げられます。

しかし、最も重要なことは、私たちが気候変動や自然の変化に伴う影響を知り、それらに関心を持ち、自分中心として考えることです。気候の変化に対し、今までの生活を見直すことが必要です。



千本松牧場
副本部長 青山 浩康 さん
酪農部長 長谷川 誠 さん

暑いのは牛も人間も同じ

昔は暑くて眠れないような夜がお盆前くらいしかありませんでしたが、ここ数年は夜でも暑い日が多く、特におとしの7〜9月は乳牛へのダメージが大きく、搾乳量が減少しました。

一般的に、気温が高くなると牛の受胎率が下がり、搾乳量が減少します。また、牛も人間と同じで、暑いと夏バテしてしまいます。その結果、餌を食べず水を大量に飲むことで、生乳の品質低下にもつながります。暑くなることで牛の体力がなくなるため、病気にもかかりやすくなります。

暑さ対策として、牛舎の扇風機を増設しています。しかし、千本松牧場の牛舎は約35年前に建てら

れたものなので、天井が低く屋根が断熱になっていません。暑さ対策を備えた牛舎に建て替えるとなると、相当なコストがかかるため、今後さらに気温が高くなるのであれば、散水したり、断熱効果がある石灰をまいたり、暑さに効果のある製品を試していったりと、手探りで対応するしかないと思っています。

千本松牧場はサイクリングコースやお土産店などを備える観光施設もありますが、台風や豪雨のときは休業しなければならぬこともあります。そのため地球温暖化だけでなく、異常気象を含めて総合的に気に掛けていかなければなりません。



千本松牧場では、観光でも酪農でも気候変動の影響を受けてしまう

変わりゆく気候…現場の声を聞きました

気候と上手に付き合っていく



にへいふあ〜む(農家)
仁平 仁 さん

昨年の台風19号の大雨では、目の前の道路から大量の水が敷地に流れ込み、流されてきたわらで入口が覆われました。栽培していたキャベツ畑15アール、白菜畑10アールも浸水してしまい、作っていた野菜が出荷できなくなりました。地球温暖化によりこのような大雨が増えてしまうと、多くの農家の存続危機にもつながると思います。

近年は地球温暖化の影響のかわかりませんが、気候が5年周期くらいで変化しているように感じます。昔は「何月何日になったらこれを植える」といったような伝統的、半ば規則的に作物の栽培時期を決めていたようです。しかし、



畑が水没し、キャベツと白菜が浸ってしまった



大雨で敷地内に流れ込んできた大量のわら

今は周期的に気候が変化してきているので、今までやってきた伝統的な栽培だけでは、気候への対応が難しくなってきたと感じます。この変化し続けている気候に対応するため、種苗の会社や各都道府県が、現在の気候に合った作物品種の開発をしてくれています。しかし、誰かが何かをしてくれるのを待っているだけでは、いざというときに何もできなくなってしまう。現代の気候を読みながら、作付けの方法や栽培時期などを工夫して、気候と上手に付き合っていくことが、これからの農業に必要なことだろうと思います。



気候変動適応情報プラットフォームをチェック！

気候変動適応情報プラットフォーム(A-PLAT)は、国立研究開発法人国立環境研究所が運営する、気候変動に関する情報基盤(ホームページ)です。気候変動の現状や影響、地域・事業者・住民が取り組める対応策などの情報を発信しています。



気候変動の情報はこちら

緩和とは？

CO₂を減らす



適応とは？

変化する気候に備える



(出典:気候変動適応情報プラットフォーム)